

# 子どもの語り促進をめざした授業実践

学籍番号 199204  
氏名 嘉門 真彩  
主指導教員 平井 美幸

## 第1章 実践課題研究の着想と目的

筆者は、養護教諭養成の段階での養護実習や保健室補助ボランティアでの活動の中から、保健室と教室での児童の言動や様子の違いの存在に疑問を抱くことがあった。それは、連合教職実践研究科における学校実習科目の活動でのA小学校でも同様の事例があった。ここから、保健室と教室での場面の違いによる子どもの様子や言動の違いに着目した。

「語る」こととは、「ある物事や経験、思いを言葉で伝える」ことであり、「自身のこれまでの人生や抱える苦しみの意味を誰かに伝えようとする切迫した試み」であると示されている。

本実践課題研究は、教員が認識する保健室と教室の場面による子どもの発言や様子の違いから、A小学校における子どもの語りにある援助ニーズに着目する。そこで、子どもたちの語りの特性を把握した上で、養護教諭の視点から子どもの語りを促進することをめざした保健教育を実践し、評価することを目的とした。

## 第2章 子どもの語りに関する文献研究

第2章では、「語り」の操作的定義について検討するため、系統的文献レビューを行い、本実践課題研究で取り扱う「語り」とは何かを明らかにすることを目的とした。

子どもの「語り」とは「子ども自身が抱える経験や思い、苦しみを自分の力で言語的に他者に伝える、または伝えようとする行為（意図をもたないものも含む）。」との操作的定義から、「語り」とは何かの示唆を得た。

## 第3章 子どもの語りにおける援助ニーズに関する事例研究

第3章では、「語り」に関して実際の学校現場にある事例から児童の語りと教員の関わりとの関係性を検討するため、プロセスレコードを適用して、子どもの語りにおける援助ニーズを明らかにすることを目的とした。

子どもと教員の援助ニーズとして①子どもは語る事が難しいこと、②子どもの語りや反応に応じて教員はその場でアセスメントしており、そこから適切に支援することが難しいこと、③教員は子どもが語ることを当てにしており、教員が行う子ども理解の手段の1つとして子ども自身が教員に対して語ってくれることを期待していること、の3つの援助ニーズの示唆を得た。

## 第4章 子どもの語りを促進する保健教育の実践をめざした学級経営への参画

第4章では、子どもの語りを促進するための授業実践に向けた検討のために、対象学級の様子や集団・個人の特性、児童と関わる教員との関係性、児童間でのやり取りの様子や実態から、子どもの語りの特性を把握することを目的とした。

対象児童等の語りの特性としては①教員に不安や困難を感じていることをわかってもらうこと、②直面している事柄に対してわからないという思いがあることで教員による支援や助言、授業内でのヒントを得たい思いがあること、の2点があるとの示唆を得た。

## 第5章 子どもの語りを促進する保健教育の授業実践及び評価

第5章では、子どもが語ること及び語ろうとすることの態度形成を養うことをねらいとして「語り」を題材とした授業を実践し、授業実践に効果があったのかについて評価することを目的とした。

授業実践による語りの教育課題の解決には授業実践が一定の効果をもたらすも、授業実践だけではすべての子どもの語りを促進することに限界があることの示唆を得た。また、語り行動があった子どもは、語ることへの肯定的な認識から語りへの意欲をもたらし、語りによって先生とつながることによってさらに肯定的な気分をもたらされており、語り行動がなかった子どもは、語ろうと思うものの、語りへの抵抗感が生じることによって語れない一方、語りそのものへの拒否感を有することがあるため、発話としての言語的な語り以外の方法での語り促進の教育実践が必要との示唆を得た。

## 第6章 成果と課題

子どもたち1人ひとりの語りの保障のために、語りの促進をめざした取り組みを養護教諭の視点から、他の教員へ向けて研修として実施し、語りの促進をめざしたさらなる取り組みの再現性と継続性の確保が必要であることが示唆された。本実践課題研究では、語り促進の取り組みをA小学校における第4学年の児童等のみを対象として実施したことから、本実践課題研究での取り組みは、A小学校のことでしかないという限界がある。

以上のことから、本実践課題研究での考察をするにあたり、養護教諭の行う語り促進をめざした授業実践の教育的意義を見出すことができた。

## 第7章 結論

教員が認識する保健室と教室の場面による子どもの発言や様子の違いから、A小学校における子どもの語りにある援助ニーズに着目した本実践課題研究によって、子どもたちの語りの特性を把握した上で、養護教諭の視点から子どもの語りを促進することをめざした保健教育を実践することができ、その評価から有用な実践的知見を得た。これらは、養護教諭が行う保健教育実践と教員が行う子ども理解の深まりの解明に貢献し、教育学・養護学分野における新たな資料になり得たといえよう。